

広島市長の課題提起

- ① 被爆体験・伝承の重要性として被爆者のメッセージ「こんな思いを、他の誰にもさせてはならない」、さらに、「過去を記憶できない者は、その過去を繰り返す運命を背負わさる」（米国の哲学者ジョージ・サンダーの言葉）を世界中に伝える。
- ② 被爆者が高齢化し、被爆体験を未来に伝えるために新たな活動が必要―「被爆体験記や詩の朗読」「詩歌・文学・演劇・映画・美術等による表現」「世界中から毎年10トン届けられる折鶴による『平和の循環』（折った子どもが大人になったときに子どもを連れて自分の折鶴を見に広島を訪問してもらう、そのために折鶴ミュージアムの建設）」
- ③ 被爆の実相を伝えるために全米における原爆展の開催（2007～2008 年にかけて101カ所）
- ④ 核兵器が使われる可能性が異常に高くなっている。国家レベルの努力だけでは難しく、市民の声を元に新たな動きが必要。核兵器廃絶のために都市が立ち上がるべきである。「市民の力で解決を図らなくてはという危機感」「21世紀は人類の叡智を基に、国際政治も含めて市民の力で問題を解決できる時代」「温暖化対策では既に世界の都市がリーダー役」
- ⑤ 何故、都市や市長が核廃絶を訴えるのか。「都市は市民と苦楽を共にしてきた。」
「都市の歴史は悲劇の歴史―アウシュビッツ、イーペル(ベルギー)、ヒロシマ・ナガサキなど」「市民の生命・財産・福祉に直接の責任を持つ。」「市民に一番近い政治的存在として、市民の声を国や世界に代弁する立場ある。」「二度と悲劇を繰り返さない決意。」
- ⑥ 平和市長会議（会長は広島市長）の構成は、世界130国・地域2311都市、毎日数都市の割合で増加中。国内でも拡大を。⑦2020ビジョンの達成に向け、2010年までに核兵器禁止条約制定、2020年までに全ての核兵器を廃絶を。そして最後に「There Is Still Time, Brother.（まだ時間はある）」と締めくくった。